

---

# 異世界回帰ナイトメア

ウスバー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界回帰ナイトメア

### 【Nコード】

N6970Y

### 【作者名】

ウスバー

### 【あらすじ】

深夜0時、気付くと俺はファンタジーゲームのような世界に立っていた。

夜毎に異世界に飛ばされる俺は、今夜もこの悪夢の世界で、消えた幼なじみを探す。

## お読みになる前に

この作品は、現在なろうに投稿中の別作品『天啓的異世界転生譚』に足りない要素（シリアス・バトル・謎解き・成長・一人称）満載の話を書いて、気分転換しようとして作り始めた物です。

それなりにまとまった量が出来たので試しに投稿をさせて頂きますが、別作品については頑張りすぎて燃え尽きた感があるので、こちらは頑張りません。のんびりひっそりと進めていくつもりです。

以下、頑張らないポイント。

- ・更新速度を頑張りません。

最初にスタートダッシュでいくらか投稿した後、週一か隔週くらいで更新して、ロングラン投稿を目指したいと思っています。

- ・感想を頑張りません。

当面の所は感想・レビュー欄は閉じておきます。誤字脱字や設定のミスについては必ず出て来るでしょうが、あまり気にしないことに決めました。見つけても笑ってスルーしてやってください。

- ・ジャンルも頑張りません。

この作品は神様転生でも勇者召喚でもVRMMOTリップでもありませんが、大体それに準ずる物です。

また、この作品の主人公はチートでも最強でもありませんが、大体それに準ずる物です。

- ・情景描写まで頑張りません。

風景・景色の描写、文化・生活の描写、ついでに人物の容姿・服

装等の外見描写、全て苦手ですのであまり頑張りません。

異世界旅行記的な面白さはおそらくありませんのでご注意ください。

・告知もやっぱり頑張りません。

不定期に気の向くままに更新。次の更新予定なんて本人もたぶん知りません。

また、予告なくちよくちよくと文章や設定等をいじり、特にパラメータ関連は知らない内に細かい修正が入ったりするかもしれません。

さすがに全面改稿等、大規模な修正をする時は最新話のあとがきで告知するつもりですが、たぶんそんな頑張りが必要なことはそもそもやりません。

・シリアス・バトル・謎解きはちよつとだけ頑張ります。

シリアスもバトルも書くのは苦手だったりしますが、ほんの少しだけ頑張ってみます。

ファンタジーに謎解き要素がある必要性は皆無だと思いますが、こちらはかなり頑張ってみるつもりです。

こんなに頑張らない作品でも読んでやるよという寛大な方は、是非『次の話』をクリックしてみてください。

初っ端から意味不明なプロローグが始まるはずです。

では、楽しんで頂ければ幸いです。

## プロローグ

たぶん、十日ほど前のことだったと思う。

月明かりの下で、俺はいつものように縁ゆかりと話をしていた。

『世界は暗闇に包まれ、既存の秩序や法則は全て崩壊し、確かな物は何一つありません。』

この世界で貴方が初めて見つけた物は何ですか？』

『それ、何の心理テストだ？』

突飛なことばかり言う奴だったが、今日のそれは一際荒唐無稽だった。

『んー。悪夢の世界を生き抜けるかどうかのテスト、かもね』

『意味が分からねえよ』

なんて突っぱねても、俺が縁の言葉を無視できるはずもなく、数秒ほど置いて、俺は結局答えていた。

『光、かな？』

『ひかり？』

意外そうな顔をされたけど、それほど意外な答えでもないはずだ。

『だって、真っ暗なんだろう？ だったら懐中電灯でも、ペンライトでも何でもいい。』

とにかく明かりがないと、困るじゃないか』

『どうして？』

真顔で聞いてくる。

『どうして、って……』

それが当たり前だからと、俺はそう答えたかった。  
しかし、縁の表情がそれを許さない。  
なぜなら実際に、俺が考えていたのはもっと別の理由なのだ。

『どうして明かりがないと、困るの?』

それを読み取ったみたいに、窓から身を乗り出して、幼なじみの顔が近付いてくる。

俺は、これに弱い。

急に心臓が狂ったみたいに高鳴って顔面に熱が集中して、何を考えていいのかわからなくなる。

そして、それが分かっててこいつはこんなことをしてくるのだ。

『だって、明かりがないと……』

だから俺は、為す術もなく重い口を開く。

耳の後ろを流れる血潮の音が耳障りで、月明かりで火照った顔を見られないように、微妙に顔を逸らしながら……。

それでも、俺は言ったんだ。

赤面物の台詞を、真顔で。

『お前を、探しに行けない』

それを聞いて、不意打ちを受けたみたいに目をまるくして、それからその顔が泣きそうな形にくしゃっとゆがんで、まるで泣き笑いのような顔で、縁は

「じゅめんね、光……。ちよなひ……」

「お兄ちゃん！」

静寂を揺らす無粋な声に、俺はゆっくりと目を開ける。  
途端に俺の網膜に、刺すような人工的な明かりと、年下らしき少女の顔が映る。

こいつ、誰、だっけ？

まだ、頭が働かない。

というか、ここ、どこだっけ？

まだ、意識が夢の中からもどらない。

当たり前に分かるべきことが、何も理解できない。  
世界の空気に体がなじまず、体の機関が全て空転している。

「なんでお兄ちゃんはこんなところで呑気に寝てるの?!」

そんなこと俺にだって分からない。

とにかく体が重い。

眠らせて欲しい。

「縁お姉ちゃんがお兄ちゃんだけどっかに連れてっちゃったから、  
なにかあるのかなって思って、結芽もついてきたのに!」

縁、お姉ちゃん？ それに、お兄ちゃん？

脳が軋みを上げる。

結芽、か。ええと、こいつは俺の妹、だっただっけ？

「もーいいよ！ わたしはまた寝ちゃうから!」

ベッドの正面にある扉を開けて、

「もう全部知らないから！ 絶対起こさないでね！」

奥の部屋に行ってしまったおつとする結芽。

あれ？ こいつ行っちゃう、のか？

なんとなく、奥に見えたベッドだけの部屋が寂しげで、

「結芽！」

俺は意味もなく、結芽を引き留めていた。

「なに？」

結芽が俺を、驚くほど感情のこもらない目で見る。

「あー、その……」

思えば、たぶんここで俺は少しだけ、夢から醒めた。

夢から醒めて、なのにまた寝ぼけたことを言った。

「いい夢、見ろよ」

これはないだろう。年下とはいえ思春期の少女に、そんな子供だましにもならないような言葉が意味をなすはずがない。

案の定、結芽は一瞬だけきょとんとしたが、すぐに悪戯っぽい笑みでこちらを見返してきた。

「へー。お兄ちゃんは、わたしにどんな夢を見てほしいのかな？」

申し訳ないが、そんなに期待するような目で見ないで欲しい。

こっちの脳みそは既に限界だ。

眠りたい。とにかく眠りたい。出来れば楽しく眠りたい。

「俺と結芽が楽しく暮らす夢、とか？」

そんな連想から生まれたその苦し紛れの言葉は、意外にも結芽にまで届いたようで、

「ふうん。……それはとても、いい夢だね」

温かい言葉を返してくれた、と思う。

なのにその時結芽が浮かべた寂しげな表情。

それは、少女に似つかわしくない、とてもとても、大人びた顔で、

「おやすみ……お兄ちゃん」

それでも結局扉は閉まる。

結芽の姿は、その奥に消えていく。

「おやすみ……結芽」

それを見届けて、俺も目を閉じた。

それが、俺にとって全ての終わりでも、全ての始まりだった日の記憶。

この日こそが俺の、平和で平凡で平穏だった日常が、退屈だけにと愛すべき世界が終わった日。

そして、俺の前から縁が消えた日だったのだと思いつくのは、だいぶ後になってからの事だった。

## 1・ハロー、トラベラー

たぶん、『あの日』から一ヶ月と少し前。

『ゲーム？ 夢の中で？』

俺は、縁の突拍子のない話に、つい驚きの声を上げてしまった。

『あんまりびつくりしないでね、って言ったのに』

縁は少しだけ唇をとがらせた。

そんな仕種も愛らしい、ではなくて、

『だけど、そんなこと出来るのか？』

『分からないよ。分からないから、聞いてるんだし』

こつちとしてはもっと訳が分からない。

『そもそもお前って、夢で見るほどゲーム好きだったけ？』

俺も縁も、ゲームはあまりやらない方だったはずだ。

かろつじて俺は最新のゲーム機くらいは持っていたりもするが、

縁の家にそんな物があつたかどうかは……正直記憶にない。

『やらないよ。特にRPGとかそついうのあんまりやったことないから、最初は苦労した』

まだ少しだけふくれっ面のまま、縁がぶつきらぼつに言う。

『苦労、って？』

『キャラクタービルド、とか、パーティの構成、とか？』

『はあ？』

縁の口からあまりに似合わない言葉が出て来て、俺はつい間抜け顔を晒してしまった。

『そんな顔しないでよ。なんとなく集団のリーダーみたいなのを任されちゃったから色々大変だったの!』

顔を真っ赤にして怒る縁もやっぱり愛らしい、ではなくて、

『あ、悪い。でも、なんか本格的だなって思ってたさ』

ちよつと失礼な態度を取りすぎたか、と俺は慌ててフォローを入れた。

それを聞いても縁はまだ不機嫌そうな顔をしていたが、俺が頑張つて視線を外さずにいると、やがて表情を緩めた。

『んー、もういい。』

光一にゲームのこと、色々聞いてみようと思ったけど、考えてみれば光一だってそんなにゲーム詳しい訳じゃないもんね。ネットとが使つて自分で調べる。

あーあ、説明書さえあればなあ……』

そして、ようやく機嫌を直した縁に対して、

『さすがに夢にマニュアルはないだろ』

と無神経な一言を言つてまた縁をふくれっ面に戻すことになるのだが、それもまた、遠い日の記憶で……。

「……ただいま」

俺はあいさつというより、独り言みたいにそう言い捨てながら、玄関の扉を開けて、

「おかえり」

すぐにその返答が返ってきたことに驚いて、玄関の前でしばし、硬直した。

「おかえり、お兄ちゃん」

それが不満だったのか、自分の存在を主張するみたいに、もう一度声がかけられる。

それで、ようやく俺の硬直は解けた。

「な、何だ、結芽ゆめか」

息をつくようにそう言って、俺は靴を脱いだ。

声の正体が義妹だと分かって俺は少しだけ緊張を解くが、それでも心臓はなかなか平常運転に戻ってくれない。

靴を脱ぐためその場にかがんでいる間にも、妹の視線を感じる。上からのプレッシャーがすごい。

靴を脱ぎながら、ちらりと前をうかがう。  
妹の真っ白な素足と、その少し上辺りまで垂れた、水色のエプロンの端が見えた。

これの色違い、俺も持つてるんだよな、なんて考えながら、出来るだけ時間をかけて靴を脱ぐ。

それでもそんな時間稼ぎには限界がある。

とつとつ靴を脱ぎ終えてしまった俺は、顔を上げながら妹に何も無いように声をかけて、

「どうしたんだよ、こんな所で。何か用事でも……」

「お兄ちゃんを、待ってた」

最後まで言わせてももらえなかった。

妹は、その黒目がちの大きな瞳にどこか思い詰めた色をたたえて俺を見ている。

……正直、何か色々ぞくぞく来た。

「お兄ちゃん。最近結芽のこと、避けてるよね」

疑問ではなく断定。

想像して然るべきだった指摘に、それでも律儀に動揺する心を鎮めるのに数瞬。

けれどすぐに持ち直して、俺は必死に取り繕って口を開いて、

「まさか。そんなことな」

「それって、好きな人ができたから？」

またも、言葉の出足を潰される。

しかしそれも当然か。

俺と結芽では言葉に入れている力が違う。

こいつの言葉はいつも直球勝負だ。

あらゆる意味で遊びがない。

だから妹は攻め手を緩めない。

「天壤先輩は、お兄ちゃんのことなんてたぶん気にもしてないよ？」  
痛烈な言葉を、たぶん、俺に痛烈に響くだろうと考えている言葉を、容赦なく吐いてくる。

……だが残念。

そんな言葉に意味はない。

そんなことはとづくに知っている。

そもそも、俺が『惚れているという設定の』天壤先輩とは廊下ですれ違ったことすらない。なのに気にされていたとしたら、その方がずつとホラーだ。

俺の無言をどう解釈したのか、妹は少しだけ語気を緩めて俺に歩み寄ってくる。

「ねえ。お兄ちゃん。前みたいにはできないのかな？」

好きな人ができたら、妹とは一緒に話すこともできないの？」

「……………」

俺は、何も答えられなかった。

そもそも、順番が違う。

好きな人が出来たから前のように話せないんじゃないじゃなくて、前のように話せないから、好きな人が出来たなんて嘘を吐いたんだ、なんて事情、当人に話せるはずもなく、

「悪い。疲れてるから」

その一言だけで話を打ち切ると、

「お兄ちゃん！」

無言の背中で妹の声を跳ね返しながら、俺は自分の部屋に向かう。

それでも、妹の声は俺を追いかけてくる。

「待って！ お兄ちゃん、ご飯は？」

「…要らない。向こうで食べてきた」  
嘘だった。

けれど、要らないのは本当だ。

まるで食欲がわかない。

もういつそのまま寝てしまおうと考えながら、俺は部屋に入る。

ドアが閉まる瞬間、

「こんなのぜんぜん楽しくないよ、お兄ちゃん……」

聞こえてきた妹の言葉が、やけに胸に突き刺さった。

「ふう……」

俺は後ろ手に部屋のドアを閉め、手早く制服から着替えるとベッ  
ドに倒れ込んだ。

俺たちが倦怠期の夫婦みたいな会話を交わす羽目になったの  
には、一応理由がある。

結芽は俺の本当の妹ではない。

一年ほど前のある日、家主の諒子りょうこさんが、

「今日から家族が増えることになったよ」

と言っていきなり連れて来たのが、彼女、遠野結芽とのおのゆめだった。

突然新しく出来た家族に当然俺は戸惑ったが、幸いにも結芽と俺の相性は悪くなかった。

俺たちは少しづつ少しづつ、お互いのことを理解して行って、それにつれてゆつくりと、ちよつとづつ仲良くなって行って、段々と仲良くなって行って、さらに仲良くなって行って、もっと仲良くなって行って、もっともつと仲良くなって行って……結果、仲良くなりすぎた。

普通の兄妹なんて物を知らなかった俺たちは、お互いに愛情を注ぐことにはばかり夢中になって、いつの間にか兄妹という関係性を飛び越えてしまっていた。

……いつからだっただろうか。

妹の俺を見る目が、妙に熱く潤んでいることに気付いたのは。

……いつからだっただろうか。

妹の俺への態度に、単なる兄妹愛以上の何かを見出したのは。

いくら義理とはいえ兄妹で色恋沙汰なんて冗談にもならない。

何より、俺たちをこうして養ってくれている諒子さんに申し訳が立たない。

そうして俺は、結芽の熱が冷めるまで、妹と距離を取ることを決めた。

そうは思っただけでも、無邪気に懐いてくる結芽を邪険に扱うのはどうにも心苦しい。

おまけに付け焼刃の兄の悲しさか、そういうことを意識してからこちら、どうしても結芽を『妹』ではなく『かわいい年下の女の子』として見てしまう自分にも気付いていた。

だからせめて、好きな人が出来たと言って距離を置こうとしたのだが、

「それを理由に詰め寄って来られちゃ、逆効果だよなあ……………」

あの妹が、そんな嘘でどうにかなるような相手であるはずがなかった。

「あー、もういいや！ 寝よ寝よ！」

本当に眠る気なんてなかったはずだったが、これ以上起きていても気が滅入るだけだ。

蛍光灯の光を、腕をかざしてさえぎる。

そのまま全てを忘れるように目をつぶって、頭の中を空っぽにする。

幸い遅くまで遊び歩いていたせいか、自分の想像よりも体は疲れて眠りを欲していた。

意識は瞬く間に、夢の世界へと旅立って……………。

(……あれ?)

気が付いた時、辺りは真っ暗になっていた。

(俺、いつ電気消したっけ?)

そんな呑気なことを考えたのも束の間、すぐに異常に気付く。

(なんだ、これ…!)

明かりどころの話じゃない。

俺は今、自分の疑問を声に出して言ったつもりだった。

なのに、声が出ない。

いや、声の出し方が分からない。

(なんなんだ? なんなんだよ、これは…!)

それどころか、体の感覚が一切ない。

手を動かそうにも、手の動かし方が思い出せない

足を動かそうにも、足がどこにあるのかすら分からない。

目や耳も鼻も利かない。

世界を知覚する全ての情報が遮断されていた。

何が何だか分からない。  
あまりに状況が理解出来ず、パニックを起こしかける。

だがそんな時、闇に『声』が響いた。

「ハロー、トラベラー。」

ナイトメアの世界にようこそ。

貴方は7013027492人目の探訪者トラベラーです」

## 2・ユニークスキル

たぶん『あの日』から、十日ほど前の記憶。

『だって、明かりが、ないと……』

だから俺は、為す術もなく重い口を開く。

耳の後ろを流れる血潮の音が耳障りで、月明かりで火照った顔を見られないように、微妙に顔を逸らしながら……。

それでも、俺は言ったんだ。

赤面物の台詞を、真顔で。

『お前を、探しに行けない』

それを聞いて、不意打ちを受けたみたいに目をまるくして、それからその顔が泣きそうな形にくしゃっとゆがんで、まるで泣き笑いのような顔で、縁は

『うん、不合格！』

それまでの雰囲気をぶち壊すようなことを、言ったのだった。

『な、何でだよ』

俺は釈然としない思いを抱いてそう抗議したが、縁にとってそれは当然の答えだったらしい。

『んー。夢の中ってというのはさ、イメージがそのまま形になる世界なんだよ？』

わたしを見つげるためにまず明かりっていう発想からしてかなり遠回りだし、どうせ光を選ぶにしてももつところ、太陽、とか、スケールの大きい物を言うべきだと思う』

『いや、太陽なんて出てきたら焼け死んじやうだろ、みんな』

俺が当然の切り返しをすると、縁は呆れたようにため息をついた。

『そういう常識的な考えが夢では障害になるんだよ。』

熱がない太陽も相手だけを焼き尽くす炎も夢の中なら存在させられるし、その辺りはとにかくイメージ次第。

だったら何でもイメージを広げていって、壮大にやっていかなきゃね』

『……いや、それは、違うんじゃないか？』

その言葉に、お前はスケールの小さい男だ、と言われた気がして俺は少しムキになった。

『例えば、ほら。懐中電灯だって便利だろ。』

そりゃ太陽ほど明るくないかもしれないけど、余計な場所を照らすこともないし、どんな場所でも、たとえ太陽の光が届かないような物陰だって、うまく使えば明るくしてくれる。

何でもでっかければいいってもんじゃない。そもそもイメージなんて広げる物じゃない、研ぎ澄ます物なんだよ』

自分でも今一つ理解の出来ない理屈を振りかざして、反駁する。

いつも通り、俺たちの意見は真っ向対立、正面衝突した。

俺たちはしばし、にらみ合って、

『…………ふふっ』

『…………ははっ』

いつものように、笑い出した。

『やっぱり光一とは、びつくりするくらい合わないね』

『そりゃあこっちの台詞だよ』

縁とは幼なじみで、誰よりも、たぶん両親よりも長い時間を一緒に過ごしているのに、考え方は正反対だったりする。

行動派と思考派というか、感覚派と理論派というか。

俺に言わせれば縁は感覚派というよりも無鉄砲を楽しむ愉快犯だし、縁に言わせれば俺は用心深く考えた時ほどありえない選択肢を選ぶ変な奴らしい。

まあどの言葉が真実かはさておき、とにかく考える前に思い付きで行動する縁と、行動する前にどうしても考えずにいられない俺とでは、何かと意見が対立する。

そして意外とそんなところが、俺と縁が長く一緒にいられる理由なのかもしれない。

それを証明するみたいに、次の縁の声に、先程までの苛立ちは微塵も見えなかった。

『だったらさ。いつか《その時》が来ても、迷ったらダメだよ』

『その、時……？』

俺の問いに、縁は直接は答えることはせず、

『わたしには理解できない考えだけど、その質問に《光》って答え  
たそれが、きつと光一の本質なんだよ。』

だから、光一は自分の信念を貫いて』

『ん、ああ……』

まるでさとすような言葉に、曖昧に俺はうなずいた。

バカにされるのは嫌だが、あんな思いつきの言葉を応援されても  
困ってしまう。

少し眉根の寄った俺の顔を見て、縁はやわらかく微笑んで、

『そんな困った顔しないで。』

難しく考えるようなことじゃないんだよ。

……光一の信じてることを、わたしは信じてる。

ただそれを、覚えていてほしいだけだから』

そして単純な俺は、もうそれだけで何もかもを信じられるような  
気がしたのだった。

そして今。  
闇の中に、誰とも知れない『声』が響く。

「世界は暗闇に包まれ、既存の秩序や法則は全て崩壊し、確かな物は何一つありません。」

「この世界で貴方が初めて見つけた物は何ですか？」

(な…！ 今、の…！)

それはあまりにも聞き覚えのあるフレーズで、驚愕がほとんど物理的な衝撃となって俺の頭を直撃する。

もちろん響いてくる『声』は縁とは似ても似つかない。

それでも、縁の言葉が、縁の声が、一年以上もの時間を越えてよみがえってくるようだった。

(そう、なのか…！)

何より俺の胸に、ストンと腑に落ちる物があった。  
だってそうだろう。

もちろん、どうやって縁がこの事態を予見していたのかは分から

ない。  
だが、

(今が『その時』なんだな、縁！)

俺にはそれで構わなかった。

本当に久しぶりに、縁を感じた。

縁の真意どころか『声』の意味も、正体にも見当はつかない。

だが、その声の主が誰であれ、俺の言葉は決まっていた。

「光、だ！」

声なき声で俺が叫んだ瞬間、その意志に呼ばれたように目の前に、  
光の筋が生まれる。

だが、弱い。

出て来たのは、周りの闇にあつという間に飲み込まれてしまいそ  
うなほど弱く、頼りない光。

(違う。そうじゃないだろ)

そんなものじゃないんだ。

俺が望んでたのは。

(そうだ。俺が、俺が望むのは……)

縁のいる所まで、俺を導いてくれる光。

どんな闇にも負けない、悪夢の世界を貫く光明。  
全ての暗闇を切り裂いて、真実を照らし出すための剣。

(だから……)

もっと強く、と念じる。

小さくても構わない。ただ、縁のいる場所まで届くほど、鋭く、強く！

(まだ、まだ足りない。もっと、もっとだ！！)

イメージを研ぎ澄ます。

淡い光の束をより合わせて、鋭い閃光を生み出すイメージ。

俺の意志に合わせて、光が収斂する。

密度を増した光が、その光度を上げていく。

(……やっとつかんだ、あいつの手掛かりなんだ)

一年前、唐突に俺の前から姿を消した幼なじみ。

あの言葉が縁の言った台詞と同じ物なら、この道はおそらく縁がかつてたどった道で、だったらその先には縁が待っていると、俺は信じる。

だから、

(光を！ 俺に、縁を見つけ出すための、光を！！)

脳がねじ切れるほどに強く念じる。

迷いなく、ただ愚直に、光だけを望み続ける。

俺が答えて、縁が信じたその光を、この世界に具現化させる。

そして、とうとう、

(出来、た…?)

俺の前に、それは姿を現した。

ちっぽけで細い、吹けば飛ぶほどの矮小な光。

だがその本質は違う。

闇に屈さず、決して折れない確固たる意志の輝きが、その光には宿っていた。

(これが、俺の……)

俺はその光に魅入られたように手を伸ばす。

だが、俺の手が光に届く前に、闇の中に再び『声』が響く。

「おめでとうございます。」

貴方はユニークスキル『真実の剣』を発現しました。

ユニークスキルは貴方を映す鏡であり、生涯を共にする相棒であり、頼れる武器でもあります。

悪夢の世界ナイトメアを旅する上で、是非とも役立てて下さい」

(ユニーク、スキル…?)

「また、ユニークスキルの発現に成功したため、貴方は『トラベラー』のクラスを獲得、ナイトメアの『探訪者』として認められました。」

では、これより新たなる探訪者、普賢光一ふげんこういちをナイトメアの世界へと転送します」

(待って、くれよ！ いきなり何を言ってるのか……)

この『声』には聞きたいことがたくさんある。

けれど、どれだけ制止の言葉を紡ごうとしても、体のない俺は無力で、結局、何も分らないまま、

「では、良い悪夢を！」グッドナイト

俺の意識は闇から引きずり出され、別のどこかへと連れて行かれる。

その、最後の瞬間、

『おかえり、光一』

懐かしい声を聞いたような気がして、俺は

「…え？」

俺は、森の中に立っていた。

### 3・氷結世界

たぶん『あの日』よりも二ヶ月くらい前。

『わたし、寝るのが怖い。最近、夢の中に他人がいる気がするの』  
そう口にした縁の顔色は、月明かりの下でもはっきりと分かるほど青白かった。

『夢の中に他人が出て来るなんて普通だろ？ 俺の夢にもよく縁が出て来るぞ』

だから俺は、わざと冗談めかしてそう告げる。

しかし、もちろんそんなことで縁の気分が晴れることはなかった。  
『わたしの夢にだって、いつも光一が出て来るけど、そういうのじゃなくて……』

俺としては、縁の夢に『いつも』俺が出て来る話は興味深かったが、問題は意外に根深いらしい。

『夢だからはっきりとは覚えてないんだけど、わたしの夢の登場人物じゃない、本当の他人がそこにいるの。』

うつん、というより、他人と、たくさんの人と同じ夢を見ている感じ』

さらに沈鬱な表情で縁はそうこぼした。

ストレス、とか、強迫観念、という言葉が真っ先に浮かんだが、俺が口にしたのは別のことだった。

『なら、今晩は俺の部屋で寝るか？』

『…え？』

縁が、珍しく驚いたような顔でこっちを見ていた。  
そりゃあ当然だろう。

口にした俺の方まで「…え？」とか言いそうになっただくらいだ。

『あ、いや、深い意味とかなくてな？』

ただ、そんなに不安なんだったら誰かが傍にいた方が何かと都合が……』

本当に俺は何を言ってしまったんだろうか。

俺に限って無意識の内に何か言うなんて、考えもしなかった。

焦って弁解していると、縁はクスツと笑った。

『ありがと。何だか勇氣出た』

『あ、ああ。そうか……』

そのいつも通りの反応が、ありがたいような少し寂しいような。

うん、と可愛らしくうなずいて、迷いのなくなった目でこっちを見る。

『もうちょっと、自分でがんばってみるよ』

『そ、その方がいいかもな』

なぜか口にしたこっちの方が動揺を隠し切れず、言葉が上滑りする。

それを、縁は特に気にした風もなく、

『それじゃ、わたしはもう寝るね』

『あ、ああ……』

今日の会話は終了になる。

俺は動揺を隠そうとすぐ部屋に戻ろうとして、

『あ、待って』

ちよっと焦ったような縁に引き留められる。

振り返った先にいた縁は、最初とはまた違う感じであつちむいて、

『また、今度。ほんとに光一の部屋で寝させてもらうから』

その言葉に世界中の時間が一瞬だけ止まって、俺は口を間拔けにも半開きにして、驚きの声を

「…え？」

俺は間抜けにも口を半開きにして、驚きの声を上げた。

一瞬前まで何もない暗闇にいたはずの俺は、なぜか一面の木々の群れの中にいた。

いや、それよりも……。

「声が、出せる」

その事実には、心の底から安堵する。

それから、ちゃんと自分の体があるか確かめようと、視線を下に下げて、

「何だ、この服……」

自分が着ている、奇妙な服に気付いた。

いや、奇妙と言うほどにおかしくはない。

THE・ぬののふく、という風情の、RPGの村人とかが着てそんな簡素な服だ。

しかし問題なのは、俺のクローゼットには絶対にこんな服は入っていないかったという事実。

そして、それ以上に奇妙なのが、

「これ、何だ？」

俺の左の腰にぶら下がっている物。

革で出来てるっぽいケースの中に、何か細長い物が収まっているっぽい。

「ええと……」

まさかな、とは思いつつ、ケースから飛び出ている握りっぽい所を掴んで、引き抜いてみる。

キラリと光る、白い刀身が姿を現した。

「マジ、かぁ……」

思わず嘆息する。

まあ実は、見た目から想像がついてはいた。

革のケースが鞘で、中には剣が入っているだろうということとは。

「しかし、これ、剣って言うには……」

短い。

短すぎる。

けれどもナイフだの短剣だのと呼ぶには長い。

「ショートソード、って奴かな？」

俺の中の乏しいゲーム知識がそう言っていた。

間違っているかもしれないが、だとしても問題ないだろう。

それよりもこんな物騒な物を抜き身で持っていたくはない。

俺は用心深く、『ショートソード（仮）』を鞘に戻した。

「で、結局、どういうことだ？」

部屋で寝ていたら、突然真つ暗な世界にいて体が全く動かせなかった。

そこで色々やったら、今度は森の中に飛ばされて、おかしな服と剣を持っている。

「さっぱり分かん」

そもそもここはどこなのか。

『声』は『ナイトメアの世界』に転送しますとか言っていたが、『ナイトメアの世界』という時点で訳が分からない。

ナイトメアと言うくらいなのだから悪夢という意味なんだろうが、だからどうしたというレベルの話だ。

夢という単語で心当たりと言えば、消える前に縁が言っていた『夢の世界でゲームをしていた』という話が思い浮かぶくらいだが、これは夢だとかゲームだとか言うにはリアルすぎた。

そもそも縁が言っていた『ゲーム』の詳しいジャンルは専門的すぎて分からなかったが（確か『VRMMO』とか『デスゲーム』みたいだとか言っていた）、RPGっぽいとも言っていたので、たぶんボードゲームやカードゲームの類ではなくテレビゲームだろう。

だったら最低でもディスプレイとコントローラーが必要なはずだが、こんな森の中にそんな物が置いてあるとは思えない。

縁につながるヒントを期待していたので残念だが、少なくともこの異常事態とはあまり関係がなさそうだった。

「第一こんな森、近所に……って、うわ！」

改めて森を眺めようと振り返ってみて、とんでもない物を見てしまった。

服装の確認に夢中になって気付かなかったようだが、森の後ろ半分は大変なことになっていた。

「こりゃ、確かに……。悪夢の世界、かもな」

思わずそう呟かずにはいられないほど、現実離れた光景が目の前に広がっていた。

## 氷の森。

そう評するのが適当なほどに、凍りついた森がそこにはあった。俺の周りはまだ霜が降りている程度だが、森の奥に目を凝らすと、木がまるまる一本氷漬けになっていたり、なかなかファンタジックかつファンタスティックな景色が展開されているようだ。

「さて、どうしようかね……」

状況は混乱している。

というより、俺の現状認識が混乱している。

このままここにおいても事態が好転するとは思えない以上、ここか

ら移動するというのが一番よさそうな選択肢なのだが……。

「猛獣とか、いないよな？」

得体の知れない場所には、得体の知れない生き物がいてもおかしくはない。

その時に、武器がこのショートソード一本というのは心もとない。他になにか、武器になりそうな物はないだろうか。

「あれ？」

自分の持ち物を改めて調べ始めて、左手首にやはり見覚えのない腕時計がはめられているのに気付いた。

ちよつと大きめなサイズの、アナログ時計。

時刻を確認すると、12時9分を指していた。

「俺、結局あのまま四時間近くも寝ちゃってたのか……」

なんて奇妙な感慨が込み上げてきたりもするが、そんなことを考えるのもこのおかしな状況から抜け出した後にする方が賢明だろう。

これ以上特に役立ちそうな物を持つてはいないようだ。

俺は覚悟を決め、安全そうな場所か、事情を知っていそうな人を求めて、ここから移動することにした。

しかしそうなると思えなくてはいけないのが、

「どつちに進むべきか」

という問題だ。

前方は、穏やかそうな春の日差しが差し込む森。  
後方は、穏やかそうな春の日差しが差し込んでるのに凍りついた森。

まあ安全性を考えるなら、断然前方の普通の森に進むべきだと思うのだが……。

「よし、決めた」

俺は少しだけ考えた後、後方、凍りついた森に向かって歩を進めた。

明らかに不自然なことが起こっている氷の森なら、俺の身に起こったこの異常な事態の答えも分かるかもしれない。  
などという後付けの理由をこねくり回してもいいが、俺がこっちを選んだ答えは簡単。

なんてことはない。

単純に未知への恐怖より好奇心が勝つたのだ。

好奇心に殺された猫っていうのは俺みたいな奴だったのかなと思いつきながら、俺はぼかぼかとした暖かそうな木々に別れを告げ、結晶化した白いオブジェの方へと歩いていく。

「ぐへっ！」

氷の森に足を進めて五分ほど、俺は早くもこっちのルートを選んだことを後悔していた。

最初の内はよかった。

地面の草には霜が降りていたし、最初にいた場所より気温は低かったが、普通に歩くことが出来た。

だが、奥に進むにつれて森の凍り方はひどくなり、今ではデコボコしたスケートリンクを歩いているような具合で、

「あぶっ！」

俺はたびたび転んだ。

幻想的なこの風景の中で、かつこつかないことこの上ない。

だが不思議と、ほとんど痛みはない。

顔面が地面にぶつかってもスポンジが間にあるような感触がして、ほとんど衝撃を感じないのだ。

「絶対、おかしいよなあ……」

もしかして痛覚が麻痺しているのかとほおをつねってみたのだが、それは普通に痛かった。

一体何が起こっているのやら。

謎が一つ増える。

「というか、この森もやっぱおかしい」

この辺りの木は幹どころか枝葉の先まで完全に氷に覆われているが、こんな広葉樹だらけの見るからに暖かな気候の森が凍りつくはずないし、そこに目をつぶったとしてもこの道は整然とすぎ

いた。

道には木の枝一つ落ちていないのに、そこから一步でも外れようとするに密集した木々が邪魔をして進めなくなる。

まるでゲームに出て来る森のフィールドみたいで、何だか不自然に感じた。

「大体、考えてみれば今が夜の12時なら、こんなに明るいはず、ないし……」

そう考えると、こんなに明るい森の中が、やはりどうにも不気味に映る。

変な生き物に襲われないだろうか、という恐怖がよみがえってきて、俺はちらりと腰のショートソードに目をやった。

そもそも、俺は荒事には向いていない。

喧嘩をしたことなんて数えるほどしかないし、とっさの判断が必要な状況に弱い。

考える前に行動する縁と違って行動する前に考える俺は、切羽詰まった状況になるほど色々と考えてしまっ、逆に動けなくなってしまうのだ。

『ピンチになると、脳からアドレナリンとかがどばどば出てさ。何か動かすにはいられないんだよね!』

などと縁は語っていたが、俺は完全に逆だった。

ピンチになるほど頭だけは冷えて、それこそ無意識に善後策を探す。

でも結局選択肢が多すぎて、何か行動を起こす前に時間切れになる。

そんな感じだ。

正直暴走トラックとかが突っ込んできたら、一步も動けずに轢かれる自信がある。

一応縁に言われて対策みたいな物を考えたこともあるが、それだつてうまく行くとは……。

なんて、心の中で愚痴をこぼしながら進んでいた時だった。

「……お？」

奥に、少しだけ開けた場所を見つけた。

氷の森に入り込んでから、初めての道の变化だ。

道が曲がりくねっているため、ここからでは全体像は見えないが、もしかするとそこに何かあるかもしれない。

とりあえずそこまでは頑張ろうと足を進める。

逸る気持ちのままに、また何度か派手に転びながら俺はよつやくその場所までたどり着いて、

「！？」

俺は瞬間、息を飲んだ。

そこにはこの世の物とは思えない、幻想的な生き物がいた。

氷の世界に佇むそれは、氷よりも澄み切った肌と、月光を湛えたかのような銀髪を持つ、一人の少女。

彼女はこちらに背を向けているため、その表情をうかがい知ることとは出来ない。

だが彼女はその後ろ姿だけで、俺を圧倒する。

その姿はまるで、触れた瞬間碎け散る、氷細工の芸術品。

線の細い妖精じみた体躯に、危うい程に白い肌。

月の光のように妖しく波打つ銀髪と、そこから控えめにのぞく、人の物ではありえない、大きく尖った耳。

「エル、フ…？」

俺の口から、意図せず言葉が漏れる。

「！？」

だが不用意に漏らされたその言葉は、彼女に俺の存在を気付かせた。

彼女は弾かれたように振り返る。

そこで初めて、後ろからでは見えなかった、彼女の顔が俺の前に晒されて……。

「な、に…？」

そして俺は、再び驚きに息を飲むことになる。

「よ、四方坂、ナキ…？」

振り返ったエルフの少女は、現実での俺のクラスメイトと全く同じ顔をしていた。

#### 4・テンミニッツアドベンチャー

『あの日』よりも前、いつとも知れないほどありふれた日の記憶。

『お前はすごいよな。ああいうとっさの時、何も考えずに動けるんだから』

『ん、光一は頭でつかちだもんね。いちいち考えてからじゃないと動けないんだっけ』

『こればかりは性分というか、条件反射みたいな物だからなあ』

『じゃあさ。もういっそ、こういう時はこうするって、全部あらかじめ考えておけばいいんじゃない?』

「よ、四方坂よもつか、ナキ…?」

呆然とこぼした、俺のそんな問いかけに対する返答は、

「ッ!」

「あ? え、ちょ…っ!」

わき目も振らない『逃亡』だった。

俺の言葉を聞くなり、彼女は即座に俺に背を向け、躊躇いのない動作で地面を蹴り、脱兎のごとく逃げ始めた。

「ちょ、ちょっと待った!」

彼女が俺のクラスメイトの四方坂であれ、そうでないにしろ、とにかく彼女は大事な情報源だ。逃がす訳にはいかない。

俺は慌てて追いかけたのだが、

「だから、少し待つへブ!」

地面が凍っていたのを忘れていた。

俺はまたも無様に転んで地面に頭突きを食らわせていた。

やはりあまり痛くはないが、その間に四方坂には距離を離される。

「くっそ!」

起き上がって必死に足を踏ん張るが、冷たい地面はそれに応えてくれない。

四方坂はその間にも曲がりくねった道を器用に進み、森の木々に隠れて姿が見えなくなってしまった。

それでも死にも狂いで進んでいく内に、

『スキル発現 魔力機動』

頭の中に変な文字列が浮かび上がり、同時に、

「お、おおっ？」

氷の上での移動が、スムーズになった。

先程までと違い、ちゃんと体の動きをイメージすると氷の上でも滑らずに足がびたつと止まる。

蹴り足の力が不十分かな、と思うような時も、十分な加速が生まれる。

……なんとなく、地面に足がついていない時も加速していたり、作用反作用的な物を考えるとちょっと不自然なくらい移動している気もしたが、とにかく速度は上がった。

今までとは比べ物にならない速さで森を進む。

それはもう、飛ぶように走る。

時々角を曲がり切れずに木にぶつかりそうになりながらも、俺は何とか速度をキープしつつ道を曲がって、

「いた！」

ようやく四方坂の姿を見つけた。  
彼女はやはり木々の少し開けた場所に、女の子座りで呆然とへたり込んでいた。

「何だ、様子が……」

探していた相手を見つけた安堵よりも、違和感の方が勝る。  
氷の地面に座り込む彼女の表情は、明らかに尋常ではなかった。  
だがその疑問の答えは、すぐに見つかった。

「な……!？」

四方坂が呆然と見上げるその視線の先には、今にも四方坂に飛び掛からんとする、怪物の姿があつたのだ。

「冗談、だろ？ あんな、生き物……」

だが、そこには、確かに怪物としか言えない生物が存在していた。  
目測だが2メートル近い長身に、びっしりと黒い鱗を生やした、  
異形の化け物。

魚人、なんて言葉が、脳裏をちらつく。

そんな怪物が、手にした曲刀を振りかざし、今にも人を襲おうとしている。

あそこに行けば、もしかすると俺も殺されるかもしれない。  
そう認識した時、俺の足は恐怖にすくんだ。

順調に進んでいた動きは滞って、全身を冷えた血が回り始める。  
頭の芯が冷えて、脳の回転ばかりが速まるイメージ。

これからどうすればいいか考え始めた脳に合わせて、行動までも戸惑って進むのを止めて……。

しかし、そんな硬直は一瞬だった。

さて、問い。

『目の前で女の子が化け物に襲われそうになっています。あなたはどうしますか？』

こんな質問にどう答えるか、真面目に考えたことはあるだろうか。

俺は、ある。

たぶん何十年生きていようが一度もあるはずがないシチュエーションだと知りつつも、細かい設定まで考えて150パターンについてシミュレーションしてみた俺は間違いなく馬鹿だが、今回ばかりはその馬鹿さ加減が役に立つ。

なぜなら、150パターン全ての答えは同じだった。

つまり、

「全力で、助ける!!」

俺は固まった足を叱咤して、もう一度強く地面を蹴って加速、一瞬だけ躊躇った分の勢いを取り戻すように、さらに走る速度を上げる。

行動する前に考える俺は、とっさの判断が必要な時でも、いや、そういう時こそ余計に考えることを優先してしまう。

だがそれはつまり、事前に方針さえ決めておけば、ここぞという時にいつだって自分の思う通りに行動出来るということでもある。

「う、おおおおおお!!」

大声を上げて、怪物と四方坂の所まで突っ込んでいく。

考えなしにただ叫んでいる訳じゃない。

彼我の距離は10メートル。

この距離を縮めるまでに、怪物の注意を四方坂から逸らす必要があった。

(まだ、速度が上がる…!)

怪物の許に一直線で向かいながら、俺は自分の走る速度に驚いていた。

自転車に乗っている時のような、いや、それ以上の風を体でかき分けながら、飛ぶように走る。

(これ、なら…!)

7メートルの距離を、瞬く間に0にする。

そして、最後の跳躍。

3メートル以上も離れた場所にいる鱗の怪物に向かって、俺は飛

ぶ。

思い切り地面を蹴りつけ、さらに空中で加速する。

そして、その最後の加速をした瞬間、俺の体にあつて俺の後押しをしてくれていた何かが、全て使い果たされたことを知る。

たぶんもう、さっきみたいな速さで移動は出来ない。

一瞬不安がよぎる。

だが、その速度だけは、今もこの体にある。

近くで見るほどに迫力を増す怪物の体がぐんぐんと近付いてくる。遠くに見えたはずのその化け物は、今はもう目前に迫っていた。

(このまま、ぶち当たる!!)

速さとは、力だ。

それは物理学も証明している。

運動エネルギーは速度の二乗×質量で決まる。

速ければ強い。止まっていれば弱い。単純明快!!

「この」

そこで、鱗の化け物がようやくこちらに気付く。

真っ黒な鱗で覆われたその顔面目掛け、俺はショートソードを振りかぶって、

「喰らえ、鱗野郎!!」



って俺は剣を振るっ。

「ぐっ！」

なのに堅い、堅すぎる手応え。

軋む刃と軋む腕。

悲鳴を上げる体に、しかし壊れても構わないとばかりに力を込めた。

そして、ある瞬間、急に手元が軽くなる。

(通っ、た…?)

そんな錯覚を抱いた俺の視界に、スローモーションのように映る、キラキラときらめく光。

手にしていたショートソードが、砕け散っていた。

(そん、な……)

顔から血の気が引く。

鱗の怪物と目が合う。

奴はにんまりと笑った、気がした。

「う、あああああああああ！！」

それでも、それでも俺は剣を振り抜いた。

もう全てが終わってしまったと分かっても、恐怖が、焦りが、そして何より事ここに至っても諦めない俺の脳が、体を突き動かす。残った刀身を、怪物の鱗に押し付けるように俺は右手に力を込めて、

「あ、れ？」

スルツとすべるように鱗の上を抜けていく刀身。

急速に抜けていく力。

急速に遠のいていく意識。

(なに、が……)

起きたのか分からない。

ただ不意に訪れた圧倒的な脱力感に、抗うことも出来ないまま、俺は地面に吸い込まれるように倒れていく。

「GYAAAAAAAAAAAAA!!」

薄れゆく意識の中、鱗の怪物が断末魔の声を上げ、その体が小さな光の粒子となって天に昇って行くのが見えた。

「お兄ちゃん！　しっかりして！　お兄ちゃん！」

「ん、ん……？」

俺はまた、妹の声で目が覚めた。  
見ると、結芽が俺の体にすがりつくようにして、必死に声をかけている。

「あれ、結芽？　何でここに……」

「お兄ちゃん！？　よかった！」

俺が目を覚ますと、妹はぎゅっと俺にしがみついてきた。

「あ、れ……？」

突然の妹の来襲に目を白黒させながら辺りを見回すが、当然ながらそこには凍りついた木も、鱗の怪物もない。  
いつも通りの自分の部屋だった。

「一体、何があったんだ？」

俺が尋ねると、結芽はハツとして俺から離れ、後ろめたそうに答えた。

「あ、あの、勝手に部屋に入ってごめんなさい。  
え、ええと……お兄ちゃんの部屋から苦しそうな声が聞こえて、  
部屋の中を見たらお兄ちゃんがうなされてるから起こそうとして、  
でも、全然起きなくて……」

「ああ、そうか……」  
「どうやらやっぱり俺は、夢を見ていたらしい。」

冷静になってみると、急に体がなくなってしまったり、いきなり  
変な場所において知り合いに会ったり、怪物と戦ったり、夢だとも  
考えなければ辻褄が合わない。

そして逆に、さっきのを夢だと考えると、あの理屈に合わない支  
離滅裂な感じは確かに夢の特徴だなと納得出来る。

第一、女の子を助けるために剣一本で怪物に向かって行ったり、  
エルフ耳になったクラスメイトを見て『氷細工の芸術品』とか論評  
してみたり、実際にいたらかなり痛い奴である。

夢の中でもなければ、俺がそんな行動を取るはずがなかった。

微妙な顔をしている俺を見てどう思ったのか、

「ごめん、ごめんね、お兄ちゃん。いやな夢、見たんだよね」

涙ながらに謝罪してくる妹に、俺は、

「……いや」

首を横に振ってみせた。

別に結芽のせいで悪夢を見た訳ではないし、そもそも……。

「良い夢……だったと思う」

「え？」

俺がひどくうなされている所を見ているからだろう。

そう口にすると、妹はひどく驚いた。

だがそれは、俺の本心だった。

はつきりとは覚えていないが、最後の瞬間、四方坂を襲っていた怪物が光になって消えていくのを見た気がする。

だったら俺は、ちゃんと四方坂を助けられたってことだ。ならそれは、良い夢だったと言ってもいいんじゃないだろうか。

「いい夢、だったの？ ……ほんとうに？」

いかにも恐る恐る、という具合に、結芽が聞いてくる。

「ああ。本当に、そう思うよ。」

その言葉に、俺がしっかりと答えてやると、

「そつ、か。いい夢、だったんだ……。」

なぜかとても嬉しそうに、妹はうなずいた。

「えへ、えへへ……。」

それから急に元気になった結芽は、いきなりそんな風に笑い出した。

正直、ちょっと怖い。

さらにそこから、ドン引きしている俺の右手を両手でぎゅっと握り締める。

「ね、ねえお兄ちゃん。さっきお姉ちゃんが帰ってきて、わたし、

ご飯温めたんだけど……。」

「ん？」

「お兄ちゃんも、夕飯まだだったよね？ 一緒に、食べないかな？」

上目遣いに、そんなことをねだってくる。

さっき見たおかしな夢のせいだろうか。

結芽に対するわだかまりが、胸の中から消えていた。

むしろ兄妹なんだから仲が良くて当然、という開き直りの気持ちがあふれてきた。

「ああ。じゃあ、頼むよ」

俺が答えると、

「ほんとっ！？　じゃ、じゃあ、お兄ちゃんの方も温めるから、すぐ来てね！

ぜったい、逃げちゃだよ?!」

妹は即座に跳び上がり、ドアの向こうに駆け出して行った。

その様子を見て、俺は思わず苦笑してしまう。

「作ってもらってるのは、こっちだって言うのに……」  
それでももちろん、悪い気がするはずはない。

（でもそういえば、三人そろって食事をするの、最近はなかったかな？）

なんてことを思いながら、俺はベッドから起き上がった。

流石にあんなに喜んでいる結芽を待たすのは悪いとすぐにドアに向かって歩き出し、その途中、何の気なしに枕元に目を向けた。

「……………あれ？」

俺の目に留まったのは、枕元に置かれていた、何の変哲もない目覚まし時計。

ただ、それを見て俺は少しばかり眉をひそめる。

その時計は、しっかりと現在の時刻、『12時4分』を示し

ていた。

## 5・現実へ

『あの日』からおそらく、一ヶ月くらい前の記憶。

一時期は夢のことで不安定だった縁だったが、どうやら最近は逆に夢でゲームをするのが面白いらしく、楽しそうに話すことが多くなっていた。

今日も縁は窓から身を乗り出さんばかりの勢いで、俺に昨夜の夢での話をしていた。

『昨夜はね、すごかったんだよ！

なんと十二人も人が集まって、一緒に巨大なモンスターを倒してね……』

『それは……確かにすごそうだな』

大人数でモンスターに挑んだのも凄いのだろうが、俺はそれより一ダースもの大人数が、横一列に並んで延々とテレビ画面に向かってゲームをする光景を思い浮かべた。

ある意味壮観とは言えるかもしれないが、シユール過ぎる……。

おかしな映像を頭を振って追い出して、俺は縁に尋ねた。

『あ、そういえば。もし夢の中で本当に他人とゲームをやってるなら、現実の世界にもその人たちがいるってことだよな？』

『そうだけど？』

あっさり答える縁。

『だったら、現実で連絡取り合ったりってことはないのか？』

ほら、連絡先交換するのが怖いならさ、例えばネットの掲示板とか使って……』

ああ、という風に縁がうなずいて、ちょっとだけバツの悪そうな顔をした。

『あー、うん。他の人に話を聞くまでは、そういうことしようかなって思ったこともあったんだけど……』

『何か問題があるのか？』

俺が尋ねると、何とも微妙な顔で縁は答えた。

『わたしはこうやって光一に話してるし、全然問題ないんだけど、基本的には』

一夜明けて。

朝は三人の時間が微妙に合わないこともあり、朝食を取る習慣はあまりないのだが、今朝は俺が起きると既に結芽がばっちり朝ご飯を用意していた。

三人そろっての食事を取り終わり、三人の中で一番出発の早い妹を台所から追い出して、ざっと後片付けをする。

手早く洗い物を片付けた俺がリビングに戻ってみると、諒子さんが一人、ソファでぐてつと寝そべっていた。

みせりじゆうこ  
未森諒子。

この家の家主で俺と結芽の保護者。

年齢不詳。ショートカットで黒髪。凜々しい顔立ち。……胸が大きい。

大きな病気のせいで高校に通えなかったが、奇跡的に回復。

大検を受けて今は大学に通っているが、人付き合いは苦手。

ただし勉強はものすごく出来るらしい。

俺と結芽以外には家族や親戚と呼べる者はおらず、天涯孤独。

そこそこに膨大だったという両親の遺産を受け継いで、そのお金で俺たちを養っている。

というのが諒子さんの自己申告によるプロフィールだが、確かめたことはない。

というか、物心ついた頃から一緒に住んでいるというのに、年齢すら分からないというのはどうなのだろうか。

今年の諒子さんの誕生日も、結芽と二人で準備してちゃんと誕生会までやったのに、諒子さんは頑として自分の年を教えてはくれなかった。

家でお酒を飲んだりしているし、二十歳は越えているとは思っているのだが。

その二十歳越えの諒子さんがごろんと動く度、だるっだるのＴシャツの胸元が揺れる。

というか絶対ノーブラだろこの人、とか思いながら、俺は諒子さんに声をかけた。

「諒子さん、俺もう行っちゃいますから、そんなところで寝られても起こせませんよ?」

その言葉に、諒子さんは「んー?」と明らかに寝ぼけた感じの声を出してから、ソファから一步も動かずに答えた。

「ああ、大丈夫。午後からはバイトだし、今日は大学をサボってもう少し寝るよ」

「いやそれ、全然大丈夫じゃないですから!!」

基本的には諒子さんは比較的勤勉な大学生だが、家族絡みのイベントがあると必ずそちらを優先した挙句、体力を使いすぎて次の日大学を休みたがる。

俺の剣幕に、

「ふふ、冗談だよ」

と諒子さんは笑ったが、正直俺の見立てでは8:2くらいという所だ。

もちろん8割の方が大学をサボってバイトに行く確率。そして2割が大学をサボってバイトもサボる確率だ。

……既に大学に行かないことは確定していた。

「本当に、寝ないでくださいね」

無駄と知りつつも一応その声をかけて、その場を離れる。

「行つてらっしゃい光一君。結芽を頼んだよ」

結局ソファから一度も離れないままの諒子さんの声に見送られ、俺は学校へと向かうことにした。

何で諒子さんに結芽のことを頼むなんて言われたのか不思議だったのだが、学校に行く支度を整えて玄関までやってきた途端、その謎は即座に氷解した。

「き、奇遇だね、お兄ちゃん。わたしもちょうど学校に行くところだったんだ」

玄関の前には、先に行つたはずの結芽がちゃっかりと待ち構えていた。

「いや、奇遇つて、お前……」

いくら何でも苦しすぎる言い訳だった。

「それに、時間大丈夫なのか？」

「……あっ！」

俺の問いに、結芽が泣きそうな顔になる。

結芽の通っている中学は俺の通う高校より若干遠いため、俺と時間を合わせると随分とギリギリになってしまうのだ。

結芽はしきりに前髪を、正確に言えば、前髪に留めてある髪留めをいじりながらオロオロとしている。

そうやって髪留めをいじるのは、本当に困った時の結芽の癖だ。  
……ちなみに、その髪留めも昔、俺があげたものだったりするんだが。

だがまあこうなっては仕方がない。

俺はため息をつくど、

「駅まで走るぞ、結芽」

そう声をかけて、先に立って走り出した。

「う、うん！ お兄ちゃん！」

それを聞いて、なぜか嬉しそうに俺の横を走り出す結芽。

実際に俺の左隣を並走する結芽は、全身から嬉しいという感情をダダ漏れにしていた。

それを横目に、もう一度こっそりため息をつく。

今度のため息は、自分自身に対してだ。

もう一度、ちらりと横を見る。

遅刻しそうになって走っているというのに、結芽は幸せそうにしていた。

ちよっとうぬぼれた台詞になるが、こんなに素直に兄を慕う妹を遠ざけようだなんて、俺はどうかしていた。

（たぶん、気を回しすぎなんだよな、俺は……）

考えすぎるのが、俺の悪い所だ。

踏み込んでみて初めて分かることだってあるというのに。

（踏み込む、か）

そういえば、このまま学校に行けば、クラスには俺の夢に出て来た少女、四方坂がいる。

(ちょっとだけ、踏み込んでみようか)

俺はそんな密かな決意を固めながら、妹と二人、駅への道を急いだのだった。

俺の所属する2年A組で一番有名な生徒は、間違いなく四方坂ナキだ。

まずもう格好からして他と違う。

病的な寒がりで、真夏でもニット帽にマフラーにロングコートの完全装備。

担任の説明では『特別な病気みたいなもの』らしいということで教師もスルーしているが、病気『みたいなもの』という説明が既に胡散臭さ爆発である。

おまけにしゃべらない。

教師に当てられても、無言で首を振るだけ。体育の授業は必ず見学。

でもテストの成績は良く、いつも学年で10位以内。

しゃべらないのは授業だけでなく、休み時間も同様で、友達やクラスメイトと話している所をほとんど見たことがない。

前に隣の席にいた男子が三ヶ月で聞いた彼女の唯一の肉声が、「寒い」の一言だったというのだから、これはまた相当だ。

なのに美人。

マフラーとニット帽を外さないため、露出している顔のパーツは少ないのだが、それだけでも十分に美人だと分かるレベルの美人。

噂ではその美貌に引かれて告白した男子もいるとかいないとか。それについては、嘘か真か、返事がどうこう言う前に告白自体をスルーしたという逸話まで残っている。

そんな所から、クラス内でのあだ名は『ブリザード』。あるいはマンガか何かのキャラ名から、『氷結の魔女』なんて呼ばれたりもしているらしい。

で、あるからして、

(そんな人間に話しかけるなんて無理、だよなあ……)

朝、密かに決意を固めたはずの俺は、放課後間近になっても四方坂に声がかけられないでいた。

最後の授業が終わってから、担任が来るまでの自由時間。

俺は勇気を出して、彼女から2メートルほどの距離にまでは近付いてみたのだ。

だが、声をかけるきっかけが掴めない。

というか、今思ったのだが、

『やー、実は昨日の夢に君が出て来てさあ……』

思いつきりナンパの台詞だった。

本当にあったかも分からない夢の話を実に、女の子を口説こうとしている変な奴だった。

(ま、まあ妙にリアルな夢だったけど、別に俺の見た夢が四方坂と関係あるはずないんだし……)

話しかけたりしなくてもいいや、と自己完結しようとした時だっ

た。

(…………え?)

今まで彫像のようにじつと正面を見て動かなかった四方坂が、横を、俺の方を向いた。

そして、

「……………なに？」

しゃべった！！

いや、人間なんだからしゃべるのは当たり前だが、四方坂の肉声を聞いたのは初めてだったので、俺はえらくテンションが上がった。しかも、その声が確かに俺に向けられたというのがなぜだか誇らしかった。

もうこうなればと覚悟を決め、話しかける。

「き、昨日、変な夢を見たんだけど、その夢に四方坂が出て来たから、ちよつと気になったんだ」

やっぱり完全にナンパの台詞だったが、気にしない。

じつと四方坂だけを見つめる。

「…ゆ、め？」

小さな言葉と共に、彼女の無表情がほんの少しだけ揺れた。

その反応が嬉しくて、俺はさらに身を乗り出すようにして話を続けて、

「そう！ おかしいんだけどな。  
その夢では四方坂が銀色の髪にとがった耳をしてて、まるでエル  
けれど、最後まで言葉を続けることは出来なかった。」

パシン！！

という乾いた音が耳元で破裂して、俺は文字通り言葉を失った。

いつの間にか立ち上がった四方坂に、俺が平手打ちをされたのだと気付いたのは、さっきまで喧騒に包まれていた教室が、水を打ったように静まり返ってからだだった。

打たれた頬を押さえることも出来ず、呆然とする俺に、

「あなたがどういっつもりかは、知らない」

静かな迫力を湛え、四方坂が詰め寄ってくる。  
その迫力に押されたように、窓ガラスがピシピシと音を立てる。

「でも、それ以上話すつもりなら」

四方坂と俺以外が凍りついたように静止した教室で、一步、二歩と後ずさる俺を、彼女は視線だけで追い詰めて、

「あなたを、殺すから」

決定的な一言を放つ。

そのあまりの迫力に、俺はヒュツと息を飲んだ。

俺は最後の気力で、俺が話しかけたはずのクラスメイトの姿を見る。

だがそこにいたのはもう、何をしても無感動な、謎めいた少女なんかではなかった。

あらん限りの呪いを込めて敵をにらみつける、傷つけられた猛獣のごとき存在が、俺の前には立っていたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6970y/>

---

異世界回帰ナイトメア

2011年11月27日06時04分発行